

神奈川支部―「仮設住宅コンペディションに参加して」

一般社団法人神奈川県建築士事務所協会主催の仮設住宅コンペディション『「未来に生きる」仮設住宅を問う』にて、このたび私達の作品「湯気笑町」が最優秀賞を受賞いたしました（メンバーは、新建神奈川支部の大西、小野、椎木、永井、および専門学校生の天野さん、永島君の6名）。

仮設住宅のコンペとは、そもそもどのようなものか？多くの方は「迅速に快適な住まいをどれだけ早く建てられるか」を競うものというイメージを持たれるかもしれませんが、それは違います。

簡潔にいうならば「日頃私たちの社会が抱えている問題をどう解決するか」。これが仮設住宅コンペディションの最大のテーマと言っても過言ではありません。私達は多くの社会問題に目をつむりながら日常を生きています。そんな生活が成り立つのは、首の皮一枚で繋がっているような社会インフラや人々の細々とした努力によるものです。大災害という非常時においては、このような脆弱な体制はいとも簡単に崩壊してしまうことは容易に想像できます。

「今でさえ十分でない高齢者や障害を抱える方のサポートをどうするのか？」、「ただでさえ希薄な人間関係の今日にあって、どのように復興への人々の団結感を作るのか？」、「消費が伸び悩む今、被災を受けてもビジネスを成り立たすにはどうするか？」などなど。非常時に発生する問題は山積しています。

では、「建築」はこのような社会問題をどこまで解決できる可能性があるのでしょうか？

建築は人の”心を”変えることはできませんが、人の”動き”を変えることはできます。私達の作品の最大の特徴は仮設住宅群の『住棟配置』と建物に持たせる『役割分担』を意識して、『人の動き』を生み出すプランにした点にあります。全部をご紹介しますと長文になってしまうので3つ簡単にここではご紹介させていただきます。①高齢者の共同住宅のすぐ脇に仮設商店街を作りました。足腰の不自由な方でも、気軽に買い物に出られる環境を作ることで人の動きが生まれます。②市外からやって来るボランティアの拠点と被災者が運営する旅館・飲食店を設けました。お金を持ってる外部の人を集める場所と、お金を被災地に落とす場所を明確にしてあげることで、売り買いの人の動きが生まれます。③誰もが利用できる銭湯（温泉）を設けました。昔より「裸の付き合い」という言葉がありますが、人々が自然と集まって顔を見合う場所を作りました。（ちなみに湯河原町の温泉は、古くは万葉集に掲載されるほどの古くから人々に愛される名湯です）

今回のコンペディションの結果が実際の復興計画にどこまで生かされるかは不明瞭ですが、この作品が何かの形で災害が発生した時に生かされて欲しい。あるいは日常の社会問題の解決に役立って欲しいと願っております。（神奈川支部・椎木祐介）

提案対象地は、湯河原町の中心市街地からは離れた高台の運動公園でした。災害が起きた時に、日常の地域社会が抱える潜在的課題が顕在化する事を感じてきたこともあり、まず湯河原町の現状を詳しく調べ、どんな課題があって、どんな地域要求があるのかを把握することからはじめました。立地条件や諸課題から、仮設とはいえ恒久的利用や災害前から対象地への認知を高めるためのプログラム提案もしました。

コンペディションというと建築デザインを競うイメージがありますが、ベーシックなまちづくり提案を評価いただけたことが良かったと思えました。

（神奈川支部・小野誠一）